

中世ウイグル文化の百科事典 『クタドゥグ・ビリク（福楽智慧）』

アブドゥシュクル・ムハンメド・イミン
(間野英二・李昌植訳)

I ウイグル学研究の鍵となるもの

ウイグル民族は、中央アジアの諸民族の中でも、古い文化的伝統を持つ民族である。そしてウイグル民族は、その悠久の歴史の過程の中で、輝やかな文化を築き上げて来た。ウイグル民族は、その豊かつ多彩な言語・文学・音楽舞踊・建築・絵画・彫刻・造型芸術・民族医学などによって、そして又、宇宙と人類に関する深遠な哲学的・社会学的観点によって、更に翻訳学方面におけるすぐれた活動によって、わが国と世界の文化の宝庫の充実のために大きな貢献をした。

ウイグル民族は、中央アジア文化史の中に、輝やかな地位を占めているばかりでなく、東西文化交流史上においても、模範的な活動を行なって来た。ウイグル民族は、世界史的な意義を持つ文化融合主義（*mādinīyat unwirīsalizim*）の流れの中であって、独自の特色を持つ現地的文化類型の形式の形成のためにも、多大な貢献をした。

ここで説明を要するのは、ウイグル民族の豊かつ多彩な精神文明は、強い民族的な特色を有するという事、言い換えれば、鮮明な民族的形式と地方的風格を有するという事、しかし同時に、全人類の豊かつ国際的な性質をもあわせ持っているということである。民族文化を離れて国際文化を論じて、又、国際文化の影響を離れて、つまり融合主義（*unwirīsalizim*）の影響を離れて、民族文化を論じて、皆むだなことだと思ふ。この意味でいう時、中央アジアは国際文化のひとつの重要な発祥地だと言わなければならない。真と偽、善と悪、美と醜に対するウイグル人民の見方と感情は、独特な民族的

本稿は、1986年10月3日から10月18日まで、国際交流基金と京都大学文学部羽田記念館の招きで来日された新疆大学中文系 Abdushukur Muhammed Imin 教授が、10月4日、第14回羽田記念館講演会で読まれた講演原稿（中国文およびウイグル文）を、間野英二・李昌植が共訳したものである。

形式と地方的風格を持っている。そして同時にそれは、全人類の性格を持つ彼らの精神世界をもあらわしているのである。

ウイグル民族の整然とした、調和のとれた文化体系は、このような特徴を持ち、それは、ウイグル文化の各領域と各歴史的段階に一貫して認められるものである。そして、このような特徴を背景に、ウイグル文化の歴史的段階が形成されてきた。ウイグル学の当然の使命は、このウイグル文化の歴史的段階の形成過程とその歴史的特徴を究明する所にあり、またその特徴の、各領域と階層における表現形式を全面的に究明する所にあるのである。ウイグル民族が作り上げ、今日も継承している、整然とした模範的な文化史について重点的な研究を行わずして、中央アジアの文化史を語ることは困難である。また、そのような研究なくして、この地で生まれ、しかも東西文化を十分にとり入れ、かつそれに影響を与えた、世界的な意義を持つ、古代の融合主義文化について、人を納得させるような説明をすることも、またむずかしいであろう。

すぐれた思想家であり、学者であり、詩人でもあるユースブ・ハス・ハージブ（1019～1085）と、彼の、全83章、13,000行に及ぶ哲学長詩『クタドゥグ・ビリク』は、イスラム化以後のウイグル文化史と中央アジア文化史の中に、特に崇高な地位を占める。彼の長詩は、カラ・ハーン朝が安定し繁栄した時期にカーシュガルで書かれた。彼がこの詩を書きはじめたころは、丁度カラ・ハーン朝を代表とする中央アジアの文化が世界の先進的文化として栄えた時期でもあった。当時、西欧諸国は、まだキリスト教的神学の厚い霧の中に包まれており、都市経済はなお全面的に形成されておらず、西欧は全体的に未だ統一的な民族国家を形成していなかった。4,002行にも及ぶフランスの民間長詩『ローランの歌』、3,700行に及ぶスペインの長詩『エル・シド』、9,516行に及ぶドイツの英雄史詩『ニーベルンゲンの歌』、ロシアの英雄史詩『イーゴリ戦記』などもなお著わされていなかった。このような状況は、疑いなく『クタドゥグ・ビリク』の歴史的価値をより高めるものである。

東西交渉史の研究において、中央アジアの文化史の研究が必ず必要であるのと同じように、中央アジアの文化史の研究においても、まずウイグル学の研究は欠くべからざるものである。中国におけるウイグル学の専門的な研究は、目下、その中央アジア研究の主要な一環をなしている。詩歌の形式を用いて、中世のウイグル民族の意識形態と精神文明の状況を全面的に究明した大百科事典『クタドゥグ・ビリク』は、ウイグル学研究のための、きわめて重要な鍵であると言わなければならない。

Ⅱ 『クタドゥグ・ビリク』と東洋文化の復興

ユースブ・ハス・ハージブの名著『クタドゥグ・ビリク』の中には、中央アジアの典型的な封建的伝統観念、及び哲学思想、経済、法権、倫理、教育、美学等に関する考え方やウイグル人の民族像などが集中的に反映されている。

この時期の歴史的特徴は次の通りである。(1)イスラム教はトクズ・オグズと中央アジア諸民族の中で深く根をおろしていた。(2)前イスラム時代の思想と文化的要素がイスラムのそれとますます融合を遂げていた。(3)カラ・ハーン朝がサーマーン朝を滅し、広大なマー・ワラー・アンナフル地区を占領し、更にはホーラズム、ホラーサーンのチュルク人の居住地にも有力な影響を与えていた。(4)セミレチエからガズニ、伊吾からコブドに至る広範な地域で、一つの統一的な民族共同体が形成される過程の中で、ウイグルとチュルクの諸部族は、互いに接近し、理解を深めた。(5)カラ・ハーン朝をうしろだてに、中央アジアとホラーサーンのチュルク人たちは、軍事と経済の両面において、当時勢力が衰えつつあったバクダードのアップース朝カリフに対して大きな脅威を与えていた。(6)定住生活と経済の繁栄にともなって、ウイグル・カガン国の言語を中核とするウイグル民族の精神文明は一層の隆盛期を迎えていた。この時期に至って、はじめてウイグル民族の文章語(ädibiy tili)は、アラブ=ペルシア語のわくから脱出することができ、まさに「小鹿の如くおどおどした」状態から「競馬場のたくましい馬の如き」状態に変わったのである。

『クタドゥグ・ビリク』は、当時の東洋と西洋の手写本文献の中で最も優れた文献として、民族文化の範疇を越えた、東洋の文芸復興の第3段階の前奏曲のようなものとなったのである。ここで特に指摘しておかねばならぬのは、ウイグル民族が、9世紀から13世紀にかけて世界文化発展史上の最先端に立って、理論的思惟の最高峰を目ざしていたということである。『クタドゥグ・ビリク』は、すなわち、東洋の文芸復興のしるしである。

文芸復興(つまりルネッサンス)は、人類の文化史上におけるある特定の地域の特殊な現象ではない。文芸復興は、それぞれが、それぞれの古代史と中世史を有する種々の民族の文化の発展史上にあらわれる、新しい形式の融合主義的な現象である。言い換えれば、それは一種の継承と革新を経た新たな文化的高潮である。古代のギリシア=ローマの文化は、それ以前の地域文化とは異なる文化を生み出した。すなわち、ギリシア=ローマの文化は、人類の文化史上、はじめて世界史的な意義を持つ歴史的な典型として

の、最初の融合主義文化を生み出したのである。クシャーン＝クチャ仏教文化は、それ以前の各地域の文化を越えて、古代の奴隷社会文化のいま一つの典型を形成した。中世の封建主義の歴史的条件のもとでの、わが国における南北朝時代の文化的大融合は、世界史的な意義を持つ3回目の文化的類型、すなわち輝やかなしい隋唐文化を創出した。又イスラム教が生まれてから、特にバグダードのカリフ（アッバース朝）の時期には、「アラビア文化」と呼ばれる、世界史的な意義を持つ、4回目の融合主義文化の典型が作り出された。奴隷社会と封建社会が生んだ、このような融合主義文化を基礎に5回目の文化的類型として、ヨーロッパの「ルネッサンス」が出現したのである。こういった歴史的大系は、通常には、「文芸復興」という形式によって自己の到達した文化的段階をあらわしているのである。中央アジア、インド、そしてイランが9～13世紀において、「東洋の文芸復興」の重要なない手であったことは言うにおよばぬ。

9世紀から13世紀の間の東洋のルネッサンスは、イスラム教の各カリフ王朝が、古代中国、中央アジア、インド、イラン、エジプト、シリア、及びギリシア・ローマの諸文化を融合して作り上げた文化と、順調に発展している封建経済、そして国際交流の状況を基礎に形成されたのである。

東洋のルネッサンスは、次の3つの重要な段階に分けることができる。その第1段階は、アル・マンスール、ハールーン・アッラシード、マームーンなどのバグダードのカリフの支配期にイブン・アル・ムカッファー（724～750）、ヤフヤー・イブン・マーサワイフ（～859）、フナイン・イブン・イスハーク（810～873）、サービト・イブン・クッラ（886～901）などの著名な翻訳家、注釈家をその代表としている。第2段階は、アル・キンディー（800～879）、アブー・ナスル・ファーラービー（870～950）、イブン・シーナー（980～1037）などの思想家や自然科学者たちをその代表としている。この時期において、多くの非アラブ人学者、特に中央アジアの学者たちは、アラブ語で書を著わし、そしてこれによって、かの文化類型の形成に貢献したのである。第3段階の代表的な人物は、ユースフ・ハス・ハージブ、マフムード・カーシュガリー（11世紀）、ナーセリ・ホスロー（1033～1088）などの思想家や社会学者たちであった。

カラ・ハーン朝の中期は、それが中央アジアの隆盛期に当たっていたために、社会と精神の両面において、日増しに滅び行くバグダードのカリフ政権とは鮮明な対照をなしていた。この時期の東洋のルネッサンスは、アラビアとペルシアにその中心を置いていたのではなく、むしろ中央アジア地域を中心にそのピークを迎えていたのである。この時期の特色として、次の点を指摘できるであろう。すなわち、昔はムハンマド・ムー

サー・ホーラズミーヤル・ファルガーニー、及びファーラービーなどの中央アジアの学者や思想家たちが中近東へ行って学術研究活動をしたのに対し、この時期になるとフィルドゥーシー、ウンスリー、マヌーチェフリー、ナーセリ・ホスロウ、ウマル・ハイヤームなどを代表とするアラブ、ペルシアの学者たちが、中央アジアとホラーサーン地域に来て学術活動をするようになったという点である。

『クタドゥグ・ビリク』が東洋のルネッサンスの第3段階の前奏曲として、ニザーム・アル・ムルクの『シヤーサト・ナーマ』、ウンスール・マアーリーの『カーブス・ナーマ』、及びアフマド・ユグナクの『アタバト・アル・ハカーイク』、そして又、ナワーイー、パーブル、サーイードなどの大家たちの創作活動に及ぼした影響は、甚大なものがあった。

Ⅲ 中央アジアの人文主義思想の松明

『クタドゥグ・ビリク』は、宗教的神学の経典でもなければ、中世に特有の道徳的・倫理的勸告書でもない。それに英雄史詩でも、帝王の系図でもない。この書物の歴史的価値と根本的な特質は、それが人間に関するすぐれた文学作品である所にある。まさにこの書物は、中世という条件のもとで、詩歌の形式を用いて著わされた大型の哲学百科事典 (pəlsəpiwi qamus) であり、東洋の人文主義思想 (gumanizim) の松明である。

著名なイタリアの学者ガリレイ (1564~1642) は、世界には、自然に関する書物と救世主に関する書物との、2種類の書物しか存在しないと行ったことがある。彼のこの言葉は、神聖にして侵すべからざる<帝王中心論>的な神学観念と、人類の幸福を中心的な内容とする<人類中心論>的な人文主義思想との間の深刻な矛盾を端的に物語るものである。ルネッサンスが、西洋のみでおこる文化的現象でないのと同じように、人文主義も世界的意義を持つ思想体系である。人文主義は、東洋と西洋で支配的な地位を占めている宗教的教条に反対し、人間と人間の認識の能力に関するすべての進歩的思想の精華を尊重することをその内容としている。それ故に、人文主義は、ルネッサンスと科学興起のための主導的な思想であり、理想の旗だと言わなければならぬ。

人間が現実世界の中で幸福を求めて努力して来た、このような人文主義思想を離れては、東洋と西洋のルネッサンスの出現は不可能であった。と同時に、人文主義思想の原則を離れては、東洋と西洋のルネッサンスによって生み出された自然科学・哲学・法学・教育学・文芸学等の諸成果の、人類の文化史上に持つ進歩的な意義と歴史的な価値を、正確に認識ないし評価することも不可能である。

われわれは、東洋のイブン・アル・ムカッファー、イブン・マーサワイフ、及び西洋のセヴィリアのヨハン、クレモナのヘラルドなどの翻訳家たちの中に、又東洋の「知恵の館（バイトゥル・ヒクマ）」と西洋の「オックスフォード」などの学術の中心地の中に、そして又東洋の『アラビアンナイト』と西洋の『デカメロン』など人間の感情を表現した芸術作品の中に、なお更には、東洋のカリフ・ムクタディルや西洋のカトリック教の法廷によって死刑に処せられた自由思想と進歩的な学者たちの身の上の中に、世界的な意義を持つ人文主義思想の花火を見出すことができるのである。

『クタドゥグ・ビリク』の作者の幸福観は、宗教的な迷信が来世の幸福を説くのととは反対に、目を現実の社会生活に向けているし、スーフィー主義者と厭世主義者たちが提唱する如く心を清め、欲望をおさえるのととは反対に、目を知識と教育と道徳に向けている。又封建貴族たちの専制的な、墮落した幸福観とは反対に、目を人民大衆の社会的地位と国家の法制的管理体制に向けている。

ユースブ・ハス・ハージブから見れば、人文主義とは、人に対して仁道を説くことである。言い換えれば、人道主義的手段を通じて、社会的政治的な問題を解決することである。そして、社会生活の各部門で、人間の能力と人間の尊厳を具現し、社会を人道的な社会に変え、幸福を社会的な幸福に変えることでもあった。この事実からもわかるように、彼は、ヨーロッパの人文主義者たちと啓蒙主義者たちよりも、はるか何百年もの前に、社会の幸福、及びその条件と原則を探究している。『クタドゥグ・ビリク』では、科学を、人類と動物を区別するしとみているし、暗黒と光明の境ともみている。又それは人間の尊厳の基礎であり、人類社会の発展のための指針であり、社会のすべての矛盾を解決できる良き薬だともみている。ユースブの啓蒙思想は、当時の歴史的範疇をはるかに越え、のちの先進的な思想に重大な影響を及ぼしたのである。『クタドゥグ・ビリク』に次いで現われた中央アジアとウイグル民族の古典文学の中には、一連の進歩的な思想が見られるが、それはこの書物の芸術的な具現であり発展にすぎないと私は見ている。

以上をまとめて見ると、『クタドゥグ・ビリク』は、中世という暗黒の夜空に、はじめて人文主義的な智慧の光をはなった巨大な星であり、中央アジアの人文主義思想の一つの松明であったのである。

Ⅳ 中世ウイグル文化の鏡

東洋のルネッサンスは、西洋のルネッサンスと同様に汎神論と人文主義思想を、人文

科学と呼ぶべきものの中に具現している。人文科学という名称は、東洋では、「自然学」、
「哲学」、「文学」などと呼ばれていた。われわれは、10世紀の百科全書派のリファト、
アブー・スライマーンなどの論文集（risalet）や、ファーラービーの『科学の分類』、
またイブン・シーナーの『智慧の書』、それに『クタドゥグ・ビリク』などの著作から、
東洋のルネッサンスの全貌をうかがうことができる。

『クタドゥグ・ビリク』は、哲学的長詩（pəlsəpiwi dastan）であり、ある意味では、
中世ウイグルの文化と科学・イデオロギーに関する百科事典であり鏡である。

『クタドゥグ・ビリク』は、中世という環境の下での最も实际的な汎神論たるファー
ラービーの自然哲学的な観点に基づいて、その自然観と社会観、及び幸福観などを論述
している。その中には、自然と社会に関するすべての内容が含まれているから、作者が
自分の著書を『幸福が得られる知識』と呼んだのも決して偶然ではない。

『クタドゥグ・ビリク』の作者は、唯一神アッラーが宇宙の第一番目の要因であるこ
とを認めると同時に、宇宙の本源（bayat）は、絶えまない矛盾（yaghilik）と統一
（özlik）、それに、運動と更新を重ねる、土・水・気・火の四つの要素にあると見てい
る。これは、中央アジアの諸民族が古来持っていた四素（tört dhat）に対する詳細な論
述でもある。

ユースプ・ハス・ハージブは、人間を、宇宙全体の中の調和のとれた重要な一部分で
あると見なし、人間の問題を、自然科学と人文主義の基礎の上に立って、全面的に陳述
した。そして、これによって、科学は迷信よりも高く、知識を学ぶことは神への帰依よ
りも高く、学者は宗教的な隠士よりも高いという見解を宣言したのである。このような
彼の思想は、のち、西洋哲学史の後半に出現する人文主義思想に近いといえよう。

『クタドゥグ・ビリク』の第2632行、3888行、4889行、6219行、6220行、6221行など
の詩句の中には、天文学に関する問題も現れる。そこには、十二宮の星座、四季と時間
に関する見方が見られ、数学や幾何学を用いて天体の運動を計算するという貴重な主張
もみられる。こういうすぐれた見方があるにもかかわらず、彼の宇宙観は、なおプトレ
ミーやファーラービー、及びピールーニーなどの地球中心説の枠を脱することはできな
かったのである。

『クタドゥグ・ビリク』の中では、このほかにも、数学の問題や、言語学の問題、論
理学の問題、詩学や詩人に関する問題などが探究されている。

『クタドゥグ・ビリク』は、ウイグルの文章語と詩歌芸術の発展史の中で時代を画す
るすぐれた作品である。ムーサー・ホーラズミー、ファルガーニー、マフムード・カー

シュガリーなどの学者たちが、皆やむなくアラブ語を用いて著述したころ、ユースブは、自分の巨大な著書の中で、ウイグル文学の最も美しく、最も標準的な韻文を用いて創作し、ウイグル語の宝庫を発掘する上での立派な芸術的典型を創出したのである。彼の著作は、68,000個の語彙を有する辞典としての価値を持つばかりでなく、ウイグル民族の、多形式かつ多様な題材を誇る詩歌芸術を自ら体現した里程碑の如きものでもある。

この著作を通じて、われわれは、ウイグル詩歌の諸形式とウイグル文学の持つ現実主義、そしてその抒情性、多種類の芸術的表現法を見ることができるのである。

『クタドゥグ・ビリク』の中で、著者は、政治と社会の問題については、当時の述語でいえば、〈政治哲学 (siyasi pəlsəpə)〉の観点から論述している。著者は、国家の首脳と官吏は、皆、知識と才能を持ち、道徳的にもすぐれた人々であるべきであり、知識と公正な法律が相結合することによって、社会は前進すると見ている。著者は、このような観点によって、中世の東洋における偉大な法学者 (qanunxunas)、政治学者 (siyasəxunas) のひとりとなった。特に著作の中に現われる独裁政治の制限、帝王の支配を公正な法律と結合させるべきだとする主張、又立憲君主制の主張などは、重大な民主主義的価値を有するものである。

『クタドゥグ・ビリク』は、孟子の「性善説」とも、荀子の「性悪説」とも、そして又プラトンの「善悪品徳天賦論」とも、更に又、フェーラービーの「善悪品徳後得論」ともちがうものである。著者は、善と悪と道徳などを「天賦」と「後得」などの4つの種類に分けている。著者は、その中で、人間の性質が環境と道徳の修養及び教育のもとで変化すると見、どういう人生を選んで歩むかは、全く個人の意志によって決まるものであると強調している。

『クタドゥグ・ビリク』では、「天生賢哲論」や占いなどの迷信的な観念を批判し、人文主義的教育思想を強調している。著者から見れば、智慧とは、人間の認識の能力であり、知識とは、教育の成果であり、認識とは、無知から有知に至る過程である。著者は教育は社会を幸福な道へと導く主要な手段であると主張し、上から下に至るまで、人間は皆教育に関係するべきであるとも主張している。著者は又、人間が互いに教えあい、学びあうのは、人間と動物の、根本的な相違のしるしであると見ている。

『クタドゥグ・ビリク』では、当時のウイグル民族社会の各階層・各社会的職業・財政・経済・外交・軍事などについても一連の記述をしている。「文と武」、「軍隊中の政治工作」、「将校と兵士」、「戦争の準備と動員」、「和平」、「攻撃と防禦」等々をめぐる軍事に関する彼の論述は、古代と中世における、中央アジアの草原諸ハン国の軍事行動に

ついでの詳細な分析から得た経験の総括であり、鮮明な軍事弁証法的価値を持つものである。

まさに『クタドゥグ・ビリク』は、中世におけるウイグル文化の百科事典である。

V 『クタドゥグ・ビリク』の歴史的価値

『クタドゥグ・ビリク』が著わされてからすでに900年が経過した。この著作は当時のカラ・ハーン朝の文化の発展、及びトルコ語を操る中央アジアの諸民族の文化の発展に甚大な影響を及ぼした。われわれは、15、16世紀の『クタドゥグ・ビリク』の手写本から、この著作が当時新たに開始されたルネッサンスに及ぼした甚大な影響をもうかがうことができる。偉大な思想家であり、文学者であったアリー・シール・ナワーイーは、彼の後期の哲学的著作『メフブーブ・アル・クルーブ』の中で『クタドゥグ・ビリク』の不滅の思想をはっきりと具現している。

『クタドゥグ・ビリク』は、かつて一時期は、学界に知られず、埋もれていた。前世紀と今世紀の初めになって、はじめて、その手写本が、ウィーン、カイロ、ナマンガーンで発見された。そこで、西洋の東洋学者たちの間では、大きな反響がわきおこり、『クタドゥグ・ビリク』研究のブームがおこった。1823年、フランスの東洋学者ジョーベールがこの長詩のウィーン版本を発表してから、すでに一世紀半も経った。その間にこの著作を研究した学者としては、前世紀では、ヘルマン・ヴァンパーリ、ブロッケルマン、オットー・アルベルツ、V・V・ラードロフらの東洋学者、本世紀の前半では、S・マーロフ、バルトーリド、フィットラト、ベルテリス、バスカコフ、ゼキー・ヴェリディ・アフマド、キョプリュリユザーデ・メフメト・ファト、レシト・ラフメティ・アラトなどの学者、そして、最近においては、ティホノフ、テニシェフ、ブラギンスキー、ワリトーフ、クリャシュトルヌイ、サーリフ・ムテリホフ、ミラト・ヘムラーユフ、ケユム・ケリモフなどの学者がいる。

注目すべきは、これまでの『クタドゥグ・ビリク』の研究者は、そのほとんどが、西洋のトルコ学者と東洋学者たちであり、その研究内容も、なお、各種手写本の出版と対照、ならびに翻訳と注釈といった、初期的段階にとどまっているということである。

『クタドゥグ・ビリク』は、ウイグル人民の貴重な文化財であり、中国の文化の宝庫に所蔵された、世界史的な意義を持つ宝物である。そして又、中央アジア及び東洋の思想史とユートピア的思想史上に残された人文主義的な文献でもある。

『クタドゥグ・ビリク』のウイグル文テキスト [尤素甫・ハス・哈吉甫著『福楽智慧

(維吾爾文)』, 新疆社会科学院民族文学研究所編, 北京, 1984] と中国語訳本 [优素甫・ハス・哈吉甫著『福楽智慧』, 郝関中・張宏超・劉賓訳, 北京, 1986] はすでに出版された。最近私の故郷カーシュガルでは, 第1回『「クタドゥグ・ビリク」学術研究会』が開かれた。私は, 日本及び各国の学者たちの, この著作に対するより深く, より重みのある研究を期待して止まない。と同時に, 日本や各国の学者と中国の学者との共同研究をも希望する次第である。もしそれが実現すれば, われわれは, シルクロード上に形成された融合主義的国際文化の重要な段階を, 今よりもなお一層明確にすることができるであろう。

西南アジア研究 第26号 1987年3月25日印刷 1987年3月30日発行
編集兼発行者 京都大学文学部内 西南アジア研究会 代表者 織田武雄
年会費 維持会員20,000円, 一般会員5,000円, 学生会員(大学院修士課程まで)3,000円
振替口座 京都8-19867 印刷者 京都印刷紙工株式会社 京都市伏見区毛利町6
